

熊本県立松橋支援学校 令和6年度(2024年度)学校評価表

1 学校教育目標
一人一人の個性を大切にし、きめ細やかで専門性の高い教育活動を通して、自立と社会参加に向けて、豊かな人生を切り拓く児童生徒を育てる。

2 本年度の重点目標
(1) 安全・安心で優しい教育環境づくり <ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒が安心して学び、生活できる教育環境の整備(危機管理体制の構築、安全教育・健康教育の推進) ・自尊心を育み、相手を思いやる豊かな心の育成と人権教育の充実
(2) 可能性の伸展と一人一人が輝く授業づくり <ul style="list-style-type: none"> ・肢体不自由教育校及び寄宿舎設置校として魅力溢れる特色ある学校づくりの推進 ・自立活動の充実(適切な実態把握に基づいた系統的な授業づくり)と積極的なICT活用による学習支援の工夫
(3) 自立と社会参加につなぐ教育活動と共生社会の実現をめざした教育の推進 <ul style="list-style-type: none"> ・一人一人の可能性を見出し、希望する進路の実現を図る取組の充実 ・豊かな人生を送るためのコミュニケーション力(気持ちを伝える力)の育成 ・障がい者理解を促進するための交流及び共同学習並びに居住地校交流の推進
(4) センター的機能を生かした地域の特別支援教育の充実 <ul style="list-style-type: none"> ・学校公開等地域交流を通した特別支援教育に関する理解を促す積極的情報発信 ・幼児教育施設や小・中・高等学校への巡回相談や研修会等を通した地域の特別支援教育の推進

3 自己評価総括表					
評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価
大項目	小項目				
学校 経営	経営方針の具現化	本年度重点目標の達成に向けた組織的な取組	本年度重点目標に係る分掌部の課題を解決する。	・目標、進捗状況及び成果の確認 ・共有のため、関係職員によるコア・ミーティングを実施する。	A ・個別の教育支援計画等作成の年間スケジュール、重複障がいのある児童生徒の教科の取り扱い、学校総合安全支援事業にかかる防災教育及び防災体制、自立活動においての目標設定等の教育実践研究の進め方、ICT推進のための分掌部体制整備、本校規模に適した児童生徒会の在り様、新たな入学者選抜方法、60周年記念行事等についてのコア・ミーティングを行い、学校運営の重点事項にかかる業務をスピード感をもって推進した。

	業務改善働き方改革	事務処理及び授業準備時間の確保	特に、時間外勤務時間が多い職員については、一人当たり平均で年間60時間の時間を確保する。	<ul style="list-style-type: none"> ・時間割及び年間計画を学習指導要領の標準時数を基準として作成する。 ・非常勤講師、実習教諭、特別支援学校サポートーと教師の役割分担を見直す。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・対象を教諭、講師、養護教諭及び実習教師とし、令和5年と令和6年のそれぞれ4月から12月までの期間の時間外勤務時間を比較すると一人当たり、一月に2時間18分短くなった。
	業務推進の効率化	I C T を活用した確実で、より効率的な情報伝達の方法を確立する。		<ul style="list-style-type: none"> ・グーグル・チャットの活用を推進する。 ・ゆうネット等、各種情報共有ツールの特色を生かした活用の推進を図る。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・グーグル・チャットの全面導入により、離れた職員室へ行く手間が省け、資料を印刷する必要もなくなり、業務の負担が大幅に軽減された。また、文字や資料として情報が確実に伝わる、勤務時間の違う職員との情報共有ができるなどの効果もあった。
授業の充実	自立活動の充実	自立活動における妥当性のある目標設定	自立活動の目標設定の過程を検討する取組（3年間）の2年目として、様式や会議の持ち方を検討・改善する。	<ul style="list-style-type: none"> ・目標設定の仮様式を使い、事例を挙げて試行し、様式や会議の持ち方を再検討する。 ・会議の記録やアンケート調査から、検討する。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・目標設定までの考え方、関連図の作成方法、会議の流れ、様式などを事前に研修で周知して進めたことで、話し合いをスムーズに進めることができた。 ・毎回会議の最後に職員の意見集約をすることで、成果や課題をスムーズにとりまとめることができた。 ・関連図の作成が目標設定に非常に役立ったとの意見が多くかった。 ・目標設定シートの様式については、複雑さを訴える意見があ

					ったため、精選を図り、項目を減らした新様式を作成した。
	授業の実践を支える取組	授業づくりを支えるための取組を企画・実践する。	<ul style="list-style-type: none"> ・学部研や教育座談会で授業の動画を基にした意見交換を行う。 ・授業実践に関する意見交換の場である「みんなのまつしルーム」を掲示板として活用し、OJTの推進を図る。 ・教材教具の作成研修や活用状況の報告会を行う。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・教育座談会は、希望者ののみの参加であつたものの、テーマや内容に興味を持った職員が多く、毎回参加者が多かった。 ・学部研では授業づくりに役立つ意見交換を密に行うことができた。 ・まつしルームでは、動画の投稿を通して、日頃接点のない他学部の職員からの感想を聞いたり、意見を交換したりする機会を得られた。ただ、投稿者が限られていたので、より多くの職員が投稿するよう、動画だけでなく、写真やメッセージでも良いということをこまめに告知する。
まとまる教育課程	児童生徒の実態に応じた小中高の系統性のある教育課程の編成	教育課程編成の根拠となる各教科等の年間指導計画の整理と見直しを行う。また年間指導計画を教育課程編成の根拠として活用する。	<ul style="list-style-type: none"> ・各学部で作成している年間指導計画の整理を行い、共通の様式を検討する。また教育課程検討委員会で教育課程編成の根拠として年間指導計画を活用し、小中高の系統性のある教育課程を検討する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・年間指導計画を整理し、様式を統一できるところは統一した。今後は共通した様式を作れるようにしたい。一部、各教科等の年間指導計画が未提出であったので、次年度は提出を徹底したい。 ・「生活単元学習」等の合わせた指導や各教科等の授業時数をより明確にし、次年度の教育課程の根拠として活用することができた。
	個別の教育支援計画、個別の指導計画及び各教科等の年間指導計画におけるP D C Aサイクルを意識した運用方法の検討・改善	賢者システムを使用した個別の教育支援計画、個別の指導計画等の円滑な運用を推進する。また、学校全体でP D C Aサイクルを意識した運用方法を検討する。	<ul style="list-style-type: none"> ・賢者システムの運用方法と教務関係書類の作成スケジュールを示し、P D C Aサイクルを意識した学校全体での運用方法の提案を行う。また職員のニーズ等を踏まえながらそれらの精査を行う。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・年度始めや教務関係書類の作成時期前に運用マニュアルを全体に周知した。また月行事に各教務関係書類の作成締切日を掲載し、学校全体で取り組む流れを作ることができた。 ・各学部からのニーズに合わせて賢者システムの運用方法や設定内容を改善し、円滑な運用を推進できた。

キャリア教育(進路指導)	希望する進路の実現する進路指導	自己理解のための進路学習の充実と希望する進路に沿った体験学習の実施	進路面談や拡大サポート会議で進路の希望を把握する。また、関係機関と連携して体験学習先の開拓を行う。	<ul style="list-style-type: none"> 体験学習や進路学習を通して自己理解を促す。 新入生全員の拡大サポート会議を実施し進路決定に向けた方向性を本人、保護者、関係機関と共有する。 進路希望に応じた体験学習先の開拓を関係機関とも連携しながら進める。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 本人の希望する体験学習を行うことができた。特に新規開拓も進め、9か所実習先を確保することができた。 全員の拡大サポート会議を実施することができ、3年生においては、進路面談等で相談支援員と連携することができた
		小中高を通した進路指導の充実。	保護者を含め小学部段階からの進路に対する意識を高める。	<ul style="list-style-type: none"> 小中学部における拡大サポート会議において進路についての共通理解を図る。 卒業後全般の生活について知ることができるよう、卒業生保護者を招いての意見交換会の場を設ける。 		<ul style="list-style-type: none"> 拡大サポート会議で進路に関する話し合いを行うことができ、進路に関する啓発を行うことができた。 PTAと連携し、卒業生の保護者を招いて意見交換会を行う予定である。小中の保護者に進路に向け意識を高めたい。
生徒(生活)指導	校内教育相談体制の整備	校内支援の組織的な対応	学部だけの支援では困難なケースについて組織的に対応する。	<ul style="list-style-type: none"> 校内支援検討委員会の役割の整理と今年度導入したスクールカウンセラーの円滑な運用を行う。 	B	<ul style="list-style-type: none"> カウンセリングを6回実施した。カウンセラへの学校概要の説明、児童生徒へのカウンセラーの紹介及びカウンセリングの説明から始めた。予定していた生徒が当日欠席したため、生徒がカウンセリングを受けた回数は少ないが、数人の生徒が希望するようになった。
	交流及び共同学習並びに居住地校交流の推進	障がい者理解を促進するための交流及び共同学習並びに居住地校交流の推進	障がい者理解を促進できるような内容の選定及び相手校の設定を行う。	<ul style="list-style-type: none"> 事前打ち合わせを入念に行い、内容や実施方法を工夫することで、充実した取組となるようにする。 高等学校との交流の機会を増やし、内容の充実を図る。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 直接交流の機会も増え、事前打ち合わせを入念に行つたことで、各学部ふれあいや関わりを深めることができた。 ワンチームプロジェクトで高等学校との交流を行い、教員を介しない関わりが見られるなど充実した交流を行うことができた。
	児童生徒会活動の充実	学校の実態に応じた児童生徒会の整備	児童生徒会に関する意識調査の実施及び組織の改編を検討する。	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒及び職員アンケートを実施し、児童生徒会のあり方にに関する意識調査を実施する。アンケート結果を 	B	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒と職員にアンケートを実施し現体制の児童会・生徒会の見直しを行った。全校で一体感のある取組を推進できるよう、各学部で運

				踏まえ、児童生徒会の組織改編を行う。		営していた児童会・生徒会を統合した。次年度から松橋支援学校児童生徒会として、児童生徒の主体的な活動を推進していく。
人権教育の推進	自尊心を育み、相手を思いやる豊かな心の育成	自分らしさを大切にし、互いの良さを認め合うことができる心の育成	一人一人が持てる力を發揮して活動に取り組む中で、自分の役割を果たしたり、互いに協力したりすることができる。	・ 6月「心の糸を深める月間」と12月「人権週間」を中心に、年2回学部ごとに児童生徒の実態に応じた授業実践を行う。また、児童生徒会活動や交流学習等で様々な人と関わる機会を設け、自分のことや友達のことを探り、お互いの個性を尊重し合える学習を設定する。	B	・各学部の人権推進委員を中心に、人権啓発動画の作成やコミュニケーションゲーム等、生徒の実態に応じて分かりやすく工夫した学習を行った。また、学部間交流や学校間の直接交流も行う事ができ、互いの共通点や相違点を認め合い尊重しながら活動を共にすることができた。
	命を大切にする心を育む指導	生きることを喜び、命を大切にする心の育成	自分も他者も、それぞれが大切な存在であることに気づき、毎日楽しく前向きに生活していこうとする意識を高める。	・学部毎に児童生徒の実態に応じた日常的な指導を行う。また、ポスター・標語等の作品展示による啓発活動の充実や生活情報部とも連携した取組を行う。	B	・互いによりよい学校にしていくための挨拶運動を行ったり、生活情報部とも連携しながら人権標語やポスターの積極的な作成、その他人権啓発に繋がる作品の展示を行ったりして、日頃の生活の中で意識していけるような取組ができた。
いじめの防止等	いじめの早期発見・未然防止に向けた取組の充実	いじめの早期発見及び未然防止の取組	児童生徒の状況を把握できるよう、各学期1回以上のアンケートを実施する。	・「いじめ・なやみについてのアンケート（各学期）」「心のアンケート（12月）」を実施する。	B	・全校児童生徒を対象としたアンケートを学期に1回実施し、児童生徒が抱える悩みを早期に見つけることができた。
		いじめを許さない学校風土の醸成	児童生徒主体で、いじめ防止に関する取組を実施する。	・いじめ防止に向けた啓発活動やいじめ防止に向けた集会（年2回）を実施する。	B	・各学部・寄宿舎において、「いじめを許さない行動宣言」等の取組を実施した。児童生徒が作成した宣言書は学部集会等で発表し、各学部や寄宿舎の廊下に掲示していくつでも確認できるようにした。
	いじめ防止への職員の意識向上	いじめに関する正しい認識を基にした適切かつ迅速な組織的対応	児童生徒理解を深めるとともに、いじめに関する正しい知識や対応について理解を	・年2回、いじめ防止に関する職員研修を実施する。 ・外部相談員の講話をオンデマン	B	・7月に実施した職員研修では、支援学校で実際に起こりうるいじめ想定事案についてグループワークを実施した。いじめの法的

			深める。	ドで全員が視聴する。		な定義や対応マニュアルの確認だけでなく、様々な意見を出し合い、いじめ対応について共通認識を持つことができた。2月に2回目の研修をオンデマンド・対面で実施する予定である。
地域支援	特別支援教育に関する理解を促す積極的情報発信	宇城地域特別支援連携協議会及び宇城地域の教育委員会との連携	宇城地域特別支援連携協議会及び宇城地域の各教育委員会からの要請に、COを中心に学部主事等学校全体で連携して応えていく。	・各機関で行う研修や協議についてあらかじめ提案も含めてやり取りを行い、校内での共通理解を図りながら実施する。	A	・各機関の求めに学校全体で応じた。可能な範囲で提案なども行った。 ・出席した会議内容についてはCOが聞き取り、課題等の共通理解に努めた。
	地域の特別支援教育の推進	積極的な巡回相談の実施	各教育委員会と連携を図りながら、各校(園)への働きかけを行う。	・継続してかかわることができるよう、巡回相談実施後も電話や訪問時のアフターフォローに努める。また、まとめや感じたことなどを教育委員会と共有できる場を持つ。	B	・事後の様子の聞き取りなどを行ってはいるが、子どもの変容につながる継続した相談ということについては今後の課題である。 ・巡回相談員会議に各市町教育委員会からの出席があったので、課題を共有でき、スムーズな運営につながった。
地域連携(コミュニティ・スクールなど)	学校の取組の情報発信	学校ホームページの充実及び報道機関を通した情報発信	学校ホームページ及び報道機関を通して積極的に学校の取組を発信する。	・学校ホームページを計画的に更新するとともに、積極的に報道機関に取材依頼を行う。	A	・ホームページのひと月の目標掲載本数を設定したところ、4月から12月までの期間で10本多く掲載した。 ・高等部の普通高校との交流及び共同学習、防災コンサート、並びに、Ipadによる視線入力の取組について熊本日日新聞社に掲載され、加えて、防災ソングについてFM熊本のラジオ番組で取り上げられるなど、取組を積極的に発信することができた。
地域と連携した学校課題の解決	学校運営協議会での学校課題の検討	学校の取組や課題等を地域や行政・福祉等の関係者の方々と協議することで解決の方向性を探る。	・学校運営協議会に障がい者施策に関わる行政関係者を加え、地域行政からの支援を探る。 ・防災に特化した地域の課題について、学校、地	B	・第1回の学校運営協議では、障がい者福祉にかかわる行政関係者から、南海トラフ地震が発生した場合の宇城地域における津波の予想情報が提供された。また、熊本地震後の避難所運	

				域、行政の役割の確認を行う。		菅の不十分さについて、障がい者が実際に体験した苦労やそのことに対する対応策について意見を頂戴した。
保健安全指導	防災教育の充実と体制の整備	「危機管理マニュアル集」の点検	「危機管理マニュアル集」をP D C Aサイクルに基づいて改善・更新する。	・各種避難訓練を実施後、危機管理マニュアル集の改善・更新につなげる。	B	・各種避難訓練ごとに振り返りアンケートを受け、改善・更新を行うことができた。
		防災教育の充実	保護者や地域関係者と協力しながら学校としての防災意識を高める。	・避難訓練の事前事後指導を各学部、学級単位で実施する。 ・防災研修、防災授業、実践的避難訓練（引き渡し訓練）に保護者の参加を促し、実施する。	A	・各学部が単元を組んで取り組み充実した学習を実施できた。 ・児童生徒だけでなく保護者の防災意識の向上が見られた
		防災取組体制の整備	本校の防災に関する業務について、教育、管理、連携を観点として充実する。	・コア・ミーティングを通して、共通理解を図りながら、整備していく。 ・学校安全総合支援事業に関する公開授業及び訓練を通して助言をいただく。	A	・共通理解を図ることで学校全体として各業務を推進できた。 ・公開授業及び訓練についてだけでなく、本校の防災上の課題等を確認できた。
安全な医療的ケアの実施	外部機関や保護者との連携の基、実施要項に基づいた円滑な実施	保護者や外部機関との連携を密にし、協力を得ながら、医療的ケアを必要とする児童生徒が、健康に学校生活を送れるようにする。	・担任・保護者・看護師で情報交換を密に行い、健康状態の把握に努める。 ・校内の連絡会などで課題の共有を行い、必要時は校内体制の見直しを行う。 ・松橋西支援学校との拡大ほほえみ連絡会の開催方法について検討し、実施する。	B	・登校時に健康状態や学校・家庭での様子について細やかに情報交換し、支援につなげることができた。 ・校内の連絡会ではプール活動や行事における体制等を看護師も含め、関係職員で確認することができた。 ・2校がオンライン接続し、同日開催することができた。指導医との連携を通して、健康や医ケアの状況について共通理解し、助言をいただくことができた。	
情報教育	I C Tを取り入れた授業の充実	積極的なI C T活用による学習支援の工夫	I C T機器を活用した授業実践の共有を図る。	・I C T機器基本操作の研修を実施する。 ・I C T機器の基本操作や授業実践等の情報共有体制を整備する。	B	・ドライブやフォームなどグーグル・ワークスペース研修、I pad及びパソコンによる視線入力装置に関する研修を行った。 ・授業の中で、効果的にI C Tを使う場面が増えている。

寄宿舎指導	安全・安心な寄宿舎生活の充実	安心して生活できる環境づくり	安全教育、健康教育をそれぞれ年に3回実施する。	・保健安全部、生活部が立案し、学期に1回取り組む。	B	・安全教育は、火災・地震津波・不審者対応について事前学習から訓練まで実施でき、緊張感を持って取り組むことができた。健康教育は、歯の衛生週間、熱中症予防、感染症対策と計画通りに実施できた。
		毎日が楽しいと思える寄宿舎づくり	定期的に年間行事(季節の行事、誕生会、レクリエーション等)を実施する。	・男子棟、女子棟の共働に努め、生活部を中心に月に1回寄宿舎全体で取り組む。	A	・係を中心に、月に1回の誕生会、並びに、七夕飾り、ゆず風呂、豆まき及びハロウィンパレード等の季節行事、並びに、地域との交流等、寄宿舎全体で取り組むことができた。 ・新たに校内に寄宿舎掲示板を設け、生活や活動の様子を紹介することができた。また、行事によっては学部に参加を呼びかけ多数の参加があった。
		仲間とともに協力し生活を送る中で、お互いの良さを認め合う楽しい寄宿舎づくり	年間に3回以上、人権教育を実施するとともに、余暇活動を通して仲間意識の醸成に努める。	・研修情報部が立案し、学期に1回寄宿舎全体で取り組む。 ・買い物体験、ボッチャ大会等の企画を立案する。	B	・1学期においては「いじめを許さない宣言」、みんなのことを知る「ワクワク自己紹介」、職員による人権講話、2学期においては、互いの良さを知り認め合う「ほめほめ風船」の取組、「パーソナルスペース」の取組、3学期においては、1学期2学期の取組の反省と振り返りを行うことができた。 ・近隣のコンビニに買い物に出かけることができた。ボッチャについては男女混合で実施することができ盛り上がった。下校後の体育館やホットほっとルームの利用が増え、運動したり遊んだりした。

4 学校関係者評価

学校評価アンケートから（回答数 保護者：28人/34人、職員：66人/66人）

- ・全体的な傾向を見てみると、14項目の平均が、保護者については、88.21P（R5）が93.50P（R6）に、職員については88.57P（R5）が90.71P（R6）と高くなっている。これは、学習・生徒指導をはじめとする学校の諸業務に取り組む中で、今年度の重点目標に対す

- る職員の意識が高まっていること、加えて、保護者については、面談、通知表、通信、ホームページ等でそのことが伝わっていることが要因ではないかと推察される。
- ・保護者、職員の評価を比較すると、若干だが職員の評価が低くなっている（保護者：93.50P、職員：90.71P）が、これは、職員が業務に対して真摯に向き合ったおり、評価が厳しくなっているものと思われる。ただし、昨年度は71Pの評価が今年度は62Pと著しく低くなっている学校環境については、姿勢の問題ではなく、今年度は校内全域で工事が行われ、そのことの不便さを感じているためと考えられる。
 - ・課題として、保護者・職員共に複数人の「あまり思わない」「わからない」がある。保護者への情報提供及び職員への周知、並びに、それぞれの要望や意見を聞き取ることの精度を高めていきたい。なお、学校環境については、予算が伴うことも多々あり早期に解決することは無理だが、少なくとも、今年度中に終了する工事に関しての職員が感じる不便さは解消されると考える。

5 総合評価

- ・本年度の重点目標達成に向け、関係職員によるコア・ミーティングを実施し、学校運営の重要な事項を迅速に推進した。時々に対応すべき学部・寄宿舎運営に加え、教育課程の整理、防災教育の強化、ICT推進体制の整備、児童生徒会再編成、新たな入学者選抜方法などの取組において具体的な成果を上げた。
- ・業務効率化の一環として、グーグル・チャットやスプレッドシートを活用し、情報伝達の正確性と迅速性が向上した。特に、離れた職員室への移動負担の軽減や、勤務時間の異なる職員との情報共有がスムーズになったという成果が見られた。
- ・自立活動の目標設定に関する試行を進め、シートを用いた事例検討や会議の分析を行った。その結果、関連図の作成が目標設定に有効であることが確認された。
- ・ホームページについて昨年度より多く掲載したことに加え、高等部の交流及び共同学習や防災コンサートなどが新聞やラジオで取り上げられるなど、教育活動を広く発信することができた。
- ・ほほえみライフ支援事業については、松橋西支援学校と事前協議を重ね、一部時間帯をずらしたオンライン会議という方法で同日の拡大サポート会議を実施した。指導医の助言を受けるなどして、対象児童生徒の安心・安全な環境を整えた。

6 次年度への課題・改善方策

- ・コア・ミーティングは大きな成果を上げた。次年度実施予定の60周年記念行事準備に加え、職員の専門性の向上、教育課程のさらなる整備、より計画的で確立された進路指導、そして保護者が積極的に楽しめるPTA活動など、必要な業務についてのコア・ミーティングを実施し、速やかに進めるとともに、全職員が主体的に取り組めるようにしたい。
- ・グーグル・チャットやスプレッドシートの導入で情報共有は改善されたが、複数のツールを使い分けることに混乱している面もある。この課題を解決し、業務効率化を進めることで、さらなる職員の負担軽減や教育活動の質の向上を目指す。職員間や保護者とのコミュニケーションは、顔を見て気軽に言葉を交わすことを大切な基本とすべきだが、この校務DX化も積極的に活用して、思いや方向性を共有できるようにしたい。
- ・学校運営協議会で示唆されたように、児童生徒の指導についての職員間の引継ぎや共通理解は重要である。これまでの個別の教育支援計画や指導計画を中心とした引継ぎを実施した上に、ICTを活用したビデオでの引継ぎも行うなど、新たな方法を模索していく。このことに加えて、自立活動の目標設定シートを、もっと使いやすくシンプルに改善し、指導や支援の質を高める。